

オットー・ネーベル展 知られざるスイスの画家

Bunkamura ザ・ミュージアム 2017. 10. 07～12. 17

「オットー・ネーベル」(1892～1973)は、1920年代半ばに「シャガール」「カンディンスキー」「クレー」と出会い、スイス・ドイツで活動した画家である。

本展は、ベルンの「オットー・ネーベル財団」の協力で、画伯のバリエーション豊かな作品が一堂に会するだけではなく、同時代の画家たちの作品も併せて、建築、演劇、音楽、抽象などの手がけた主要テーマに沿って様々な画風を実験的に取り入れながら独自の様式を確立していく過程に迫り、20世紀美術の流れの中での創作活動の軌跡を展開する本邦初の回顧展である。

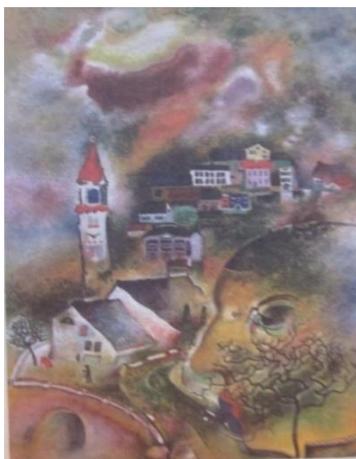
《ナポリ》『イタリアのカラー・アトラス (色彩地図帳)』より 1931年



画伯は3か月間イタリアに滞在して、風景の中のモチーフは四角い色面に置き換えられ、各都市の個性を色彩で表現しようと試み、色と形の探求の成果が美しくまとめられた綺麗な秀逸な「スケッチブック」に仕上げている。

彼は、その後も数回にわたりイタリアを訪れ、自身の視覚感覚によって制作された色彩パレットに基づいて、実際の風景を変貌させている。

《アスコーナ・ロンコ》 1927年 水彩・グアッシュ・紙



画伯は、巨匠「マルク」や「シャガール」に憧れて、1926～28年はドイツなどから移住してきた芸術家たちが集まった、スイス・アスコーナに滞在した。

「マルク」は、大胆なタッチと非現実的な鮮やかな色彩で、動物を描き人気を博した画家で、色彩豊かな明るい作品は多大な影響を与えている。

作品は、二人の影響を得て制作された“非常に明るい色彩の作品”である。

また、「ネーベル」は、都市の建築物の構成の輪郭を単純化された立方体や結晶体にあてはめて、色彩のコントラストによって捉えた作品も制作をしている。